

しゃばげ

畠中 恵著

江戸の中でも大店の一つに数えられる廻船問屋「長崎屋」の若だんな・一太郎はとても病弱でそれはそれは大事に育てられています。両親の一太郎に対する甘やかしっぷりを、大福餅の上に砂糖をてんこ盛りにして、その上から黒蜜をかけたみたいだ」と例えられるくらい扱い。その上彼の守り役である2人の兄や・仁吉と佐助も両親以上に過保護なのです。この2人の兄やではなく白沢と犬神という妖あやかしなのです。今は亡き一太郎の祖母である「ぎん」が皮衣と呼ばれる大妖であったため、一太郎は普通に人でないモノが見えたり話したりすることが出来き、なおかつ守り役の兄や達も人でないモノに任されているのでした。この若だんなは決して甘やかされたままで良いと思っっているわけではないのですが、ちよつと何かをしようとすぐに寝込んでしまうほど体が弱い。けれど彼は頭が切れ、優しくなおかつ腹が据わった人なのです。一太郎がこつそり出かけたときに何者かに襲われるというところから話が始まります。そして次々と殺人事件が起こります。最初は自分が力ギを握っているとは気づかない一太郎は、周りの妖達と一緒に事件の状況を調べていくうちに自分が動かなければ被害が拡大することに気づきます。そして事件解決に乗り出してゆきました。すごい大事件なのにのんびりとした雰囲気漂うのは一太郎と妖のやりとりが面白いからかなあと思いました。

F・N・



新潮文庫

掲載の記事・写真・イラスト等の全てのコンテンツ無断複写、転載を禁じます。

(株)ファッションビジネス・御堂筋新聞